

アイハヌム遺跡のギリシア語史料について

田 中 穂 積

はじめに

アフガニスタンの北東部、アイハヌム (Ai Khanoum) における古代都市遺構の発掘は、いわゆるヘレニズム世界の東端とみなされている地域において、はじめてヘレニズム都市の全貌的特徴を明らかにしたとあってよい。その場所はアムダリア川 (古代のオクソス川) の上流で、コクチャ川 (Kokcha) との合流地点にあたり、クンドゥーズの町より約 100 km のところである。1965 年から、P. Bernard の指導のもと、フランスのアフガニスタン考古学調査団が 1978 年まで、長期間にわたって発掘調査を続け、また、発掘の経過ならびに最終報告書も順次刊行してきた⁽¹⁾。

この都市は、北東から南西方向に流れるアムダリア川に沿って、長さ約 1.8 km、南東から北西方向に流れるコクチャ川に沿って長さ約 1.5 km で、これら両川の合流点を一つの頂点とする三角の形状をなしている。アムダリア川上流域の他の諸集落遺構と比較して、かなり大きく、また面積からいえば、ユーフラテス河畔の重要な都市であったドゥラ・エウロポスよりも大きい。

都市の構造は、川の合流点側の平地に下町があり、その東側が高所になっていて、山手の住居もあり、いちばん東端、高さ 60 m のところにアクロポリスがある。下町には、公共の施設が配されていて、都市のヘレニズム都市としての特徴をみることができる。それは、都市の主要街路がアムダリア川より東寄り、この川に平行するように南北に走っており、街路の西側に王宮とその施設、神殿、ヘーローオン、ギュムナシオン、支配者層の住居、東側には劇場が配されている。後で取り上げるギリシア語の史料の多くは、この下町の公的施

設で発見されている。

こうした発掘成果がみられたにもかかわらず、このヘレニズム都市の名前は分かっていない。アレクサンドロス大王が、今日のイラン東部、アフガニスタン、ウズベキスタン方面を征服して、かなりの植民都市を建設したことは、よく知られている。アレクサンドロスはアフガニスタンからインドに向かうとき、アフガニスタン北部、すなわち古代のバクトリアに 13,500 人の兵士を配したといわれる（前 327 年晩春, *Arrian. Anabasis, IV, 22, 3*）。バクトリアにおけるギリシア人多数の残留は、この時期から始まるが、しかしアイハヌムの都市は、その後の史的経過、また発掘結果ををふまえると、前 4 世紀末、セレウコス朝によって整備強化されたとおもわれる。

アイハヌム遺跡のギリシア語史料

アイハヌムの都市遺構の全体が東方のヘレニズム都市を知るうえで重要であることはいうまでもないが、この一箇所で見発見されたギリシア語による幾種かの記録は、中央アジアにおける貴重な史料といってよい。次に便宜上ギリシア語がみられる材質から、それら史料を分類し、紹介することにする。

1. 碑文にみられる奉獻文とエピグラム
2. パピルスと羊皮紙にみられる作品
3. 経済史料としての備忘標識
4. 貨幣
5. その他

1.-a 奉獻の刻文 (*FAKh, I, L. Robert, p. 207-211, Pl. 109; FAKh, VI, P. Bernard, p. 111-112*)

刻文は、白い石灰石の四角柱の表面 4 行からなり、石柱は高さ 89 cm, 幅 48.5 cm, 厚さ 43.5 cm, ギュムナシオンの壁の小さな壁龕のなかで発見された。前 2 世紀中頃のものと推定される。

ストラトーンの子トリパッロスとストラトーン、ヘルメースとヘーラク
レースに

ギムナシオンは体育訓練所。ヘレニズム都市における若者の体育と知性の教育の場であり、また成人市民の公共の体育場であった。ヘレニズム世界東方における例証はそう多くない。スーサ、すなわちエウライオス河畔のセレウケイアにもみられるが、このアイハヌムの遺跡のものが、現在、最も東端のものといえよう。すべてのギムナシオンでは、ヘルメースとヘーラクレースが崇拜されていたことが知られている。また、奉献者の兄弟二人のうち、トリパッロスなる名前は、トラキアにおける部族名トリパッロイに由来するとみてよい。アレクサンドロス大王の遠征に従軍したトラキア人の系統であろうか。

1.-b エピグラムの刻文 (*FAKh, I, L. Robert, p. 211-237, Pl. 108*)

刻文は、横長の白い石灰石の一つの面。石材の大きさは横 65.5 cm, 高さ 28 cm, 奥行 46.5 cm, キネアスなる人物のヘーローオン（霊廟）のプロナオス（前室）、基礎部分にはめ込まれていたもの。二つの異なるエピグラムが左右に刻まれており、いずれも韻文である。その一つを次にあげる。

1.-b-1 クレアルコスの辞言

石面の左側、4行からなり、やゝ細目の刻線、字体も小さい。

古の賢き人々が、いと高く名高きピュティオンに立ておかれたる格言、
そこからクレアルコスが心してそれらを写しとり、遥かに輝く、キネア
スの境内に立ておけり

ピュティオンは、デルポイの神殿のことで、また、「いと高きピュティオン」は、ホメーロス『オデュッセイア』（8, 80）以来用いられた表現である。「遥かに輝く」という表現は、格言そのものの内容の輝きと、刻文が遥か遠くからも輝き映えている、といった二重の意味をもっている。

1.-b-2 デルポイの格言

前出の刻文の右側，5行からなり，刻線も太く，字体も大き目である。

幼少にありては正しく知り，若者になれば自制し，壮年では公平に振舞い，年老いてはよき助言者となり，死に際しては悲しむなかれ

5世紀初期のストバイオスの伝える「ソーシアデースによる七賢人の格言」には，147首がみられた。その最後に「幼少にありては正しく知り，若者になれば自制し，壮年では公平に，老いては道理をわきまえ」という表現がみられる (*FAKh, I, p. 215*)。

ところで，クレアルコスであるが，L. Robert が提唱するようにアリストテレスの弟子クレアルコスであろうかとおもわれる。彼はキュプロス島のソロイ出身で，ペリパトス派と称されている。経歴については，不明であるが，生存は前3世紀半ば以前とおもわれる。彼には，いくつかの著作があり，デルポイについての諺にもふれ，また人生や道徳について論じ，東方の民族やペルシアのマゴス，インドのギュムノソフィスト，ユダヤ人に関心を寄せていた。彼はペリパトス派であったが，むしろ彼らを批判する態度がみられ，プラトンに共鳴していたようである⁽²⁾。

このクレアルコスが前3世紀の初め頃，アイハヌムの地を訪れたときには，セレウコス1世のバクトリア遠征の結果，この地域の支配も安定しており，マウリア朝とも友好的であった。また，デモダマスによるヤクサルテス川（シルダリア）以北への進出も，当時のセレウコス王国の東方における勢力伸長を示している (*Plinius, NH, VI, 49*)。おそらくクレアルコスは，ティグリス河畔のセレウケイア，そしてマルギアナ（イラン北東部）を經由してバクトリアに入り，彼の教育論を実践したのであろう。さらにはインド西辺に足を向けたかもしれない。彼の東方に関する叙述は，メガステネスの『インド誌』とともに読まれたとおもわれ，『人生について』の著作は，見聞を豊かにした彼の東方旅行の後であろうか。

2. パピルスと羊皮紙にみられる作品

2.-a パピルスにみられる哲学対話 (*FAKh*, VIII, p. 115-121, Pl. 52, 126. 写真は *BCH*, 111 (1987), p. 231-243)

パピルスは、11個の小土塊に付着した状態で発見された。発見された場所は、いわゆる王宮と呼ばれ、それに付属するいくつかの財庫の一室である。後で述べるように、財庫には比較的高価な物品が壺に入れられ保管されていた。パピルスに書かれた作品は、ギリシアなどでは、書架で保存されていたが、このアイハヌムでは、オリエントの他の場所でもみられたように壺に入れ保管されていたことも考えられる。また、発見されたパピルスの場所が図書室として使用されていた可能性もあり、この見方からすれば、当時、いくつかのヘレニズム君主の王宮にあった図書館から、マニュスクリプトが発見された例は見当らないだけに、珍しいこととしなければならない。

次にあげるのは、パピルスが付着した小土塊を接合したもので、表面の本文部分は、幅 19 cm から 16, 6 cm, 4つのコラムがみられ、コラムの幅は 4.5 ないし 5 cm で、14 から 18 文字、各コラムの行数は約 28 行である。コラムは左から、I, II, III, IV の順とする。字体はプトレマイオス朝期のものに似ており、前3世紀半ば頃とおもわれる。可能な限りの復元は、C. Rapin による。コラム I は判読不能。

コラム II

[2行目より] われわれは感覚がアイデアの……ただ……ではなくて、アイデア自体が、また他のものの一つを(分有)していると信じている。

であれば、言っていることは肯定できる。

したがって、それは原因であって……アイデアなる不変の存在を分有しているのではない。感覚がそれら(アイデア)の分有なのである。[12行目以下の判読は難しい]

コラム III

[3行目より] まさに、これらのことから、分有にある原因は……必然的である。つまり、先述のゆえと、また感覚（できるもの）の生成と没落は果てしないということに対して、エイドスのそれは不変である。

それは不可欠のことと言える。

しかしながら、われわれが話しているこれは、原因の原理にして第一義であるとおもわれるのである。

その通りである。

つまり、われわれが話しているこれは、すべての事柄や、それにすべてのアイデアに対する原因……他の一つ…… [21行目以下の判読は難しい]

コラム IV

[6行目から] つまり、君が理解し、（私が考える。これが私が言わんとしていることである。）その通りと言える。

……分有せず…… [12行目以下の判読は難しい]

この断片は質問者とそれに答える者との対話で、質問者は肯定か、否定いずれかの答えを引き出そうとしている。そこにはアイデア (*ιδέαι*) またはエイドス (*εἶδη*) と感覚しえるもの (*αἰσθητά*) が区別されていて、感覚がアイデアと共に有るのではなく、アイデア自体が感覚を分有しているとする。また、原理あるいは根本原因がこの断片の中心主題である。

この断片にみられるようなアイデアの分有に関しては、プラトン学派の理論に由来する。この対話集は地中海域からもたらされたと考えられ、プラトンのアカデメイアの時期から、このパピルスがみられた頃、つまり前3世紀半ばあたりまでに書かれたものであろう。P. Hadot は、アリストテレスの作品『哲学について』からではないかとみている。その理由の一つは、先にあげたペリパトス派のクレアルコスとの関連である。クレアルコスがアイハヌムを訪れたとき、彼はそこに書庫を創設し、蔵書を増やしたことが考えられる。第二点

は、発見されたパピルスの語彙とアリストテレスのそれに、いくつかの類似点がみられることである (BCH (1987), p. 244–249)。この他に考えられる典拠としては、プラトン学派のスペウシッポス、クセノクラテスらにみられる『哲学について』もあげられるし、アリストテレスの弟子テオプラストス、ポントスのヘラクレイデスも、『哲学について』を論じたかもしれない。

2.-b 羊皮紙にみられる劇の台本 (FAKh, VIII, p. 121–125, Pl. 5. 写真は BCH, 111 (1987), p. 251–258)

いくつかの小土塊に付着した二葉の羊皮紙、そのうちの一つの羊皮紙面を接合した形状は、14.5×20 cm、他のものの表面は7×10 cm、これら二つは関連ある作品の一部とおもわれる。二つとも、先にあげたパピルスが発見された箇所に近い宮殿の財庫で発見された。

これら羊皮紙に書かれた内容については、断片のため判然としない。先にあげた方の羊皮紙には2つのコラムがみられるが、その二番目のコラムは22–23行で、短長三步格であることが推定される。これは、おそらく劇の台本であろう。文献学的考察からすれば、前3世紀の後半以後から、前2世紀の前半の早い時期あたりまでとみられる。

3. 経済史料としての備忘標識 (FAKh, VIII, p. 95–114, Pl. 53–56. 写真は BCH, 107 (1983), p. 320–349)

高価な物品は、主に宮殿の財庫や、ときには別の場所で壺のなかに入れ保管されていた。その中身は、壺の表面や蓋などにインクで書かれた記録から、貨幣、オリーブ油、香料、その他が知られている。そこには、物品の内容だけでなく、その納入、チェック、移し替えといった事情を合わせて記しており、備忘のために記された標識といえることができる。それらの壺は、この都市が略奪されたときに壊され、散乱していたが、しかし、このヘレニズム都市としての終り頃の財政事情を知る手掛かりを与えてくれている。

これらの記録に関する最終報告では、30種類の壺などの容器と、それらに

みられる 40 箇所の記事やグラフィティを取り上げている。その大部分は、ギリシア語によるものであるが、アラム語のものもみられる。

次に 4 つの容器にみられる備忘標識を取り上げ、その逐語訳を試みる。

3.-a オリーブ油の移し替えの備忘標識 (出典の史料 1)

底の尖った鉢状のもの、高さ 12.5 cm、直径 18 cm、底を上にして、アンフォラあるいは大きな壺の蓋に使われていたとみられる。標識からオリーブ油の見本かとおもわれる。記事は 2 箇所あるが、その古い記事の方を次に取り上げ、他の壺のオリーブ油の移し替え記録と比較し、その復元をみることにする。

3.-a-1 5 行までが部分的に読みとれる。

- | | |
|------------------------|------------------|
| 1) 第 24 年…… | 2) (中身) オリーブ油の…… |
| 3) 空の A (容器) へ移し替えてある | 4) 二つの壺から…… |
| 5) 一つと半分 (の容量) を、そして…… | |

第 24 年は、エウクラティデスの 24 年目とおもわれる。これについては、後で取り上げることにする。空の壺 A には、ケラメイア (kerameia, 一壺単位容量の容器) の二つから、一壺と半分が移し替えられたことを示している。また、容器 A の表現は、容器 B の存在をうかがわせる。

そこで、次に関連あるとみられる陶器片を取り上げてみる。(出典の史料 2)

3.-b-1 4 行が部分的に読み取れる。

-) ……
- 1) 空の A (容器) へ移し替えてある
 - 2) ヒッピアスによって二つの壺から
 - 3) 一つと半分 (の容量)、そして封印した
 - 4) ……ソス, A を、そしてスト……

ここで二つの壺から移し替えたのは、ヒッピアスであること、この場合の容

器 A の表現は、容器 B があることを一層はっきりうかがわせている。つまり、一人の「……ソス」が A 容器を封印し、他の「スト……」が B 容器を封印したとみられ、二人による封印については、後であげる貨幣の容器の場合からも知られるのである。ここに見える二人の人名については、インド貨幣の取り扱いに関して現われている二人の名前（出典の史料 8 d）から、おそらくモロッソス、ストラトーンと推定されるのである。

そこで、3.-a-1 の 4 行目以下の復元 [] については、次の通りである。

- 4) [ヒッピアスによって、] 二つの壺から
- 5) 一つと半分の（容量）を、そして [封印した]
- 6) [モロッ] ソスが（壺）A を、そしてスト [ラトーンが、（壺）B を]

3.-c 貨幣の受取りについての備忘標識（出典の史料 4）

この容器の壺は神殿の壁龕部で壊れた状態で発見された。壺の形は卵形で、高さ 41 cm、底部直径 34 cm、口径 11 cm。3 つないし 4 つの記録がうかがえる。

3.-c-1 ドラクマ（ギリシア語銀貨）の受取り、壺の口の割れ目の下、5 行完全に残存。一番古い標識。

- 1) ゼーノンから
- 2) 計算された
- 3) によってオクセーボアケース
- 4) とオクシュバゾース、500 ドラクマ
- 5) オクセーボアケースが封印した

これはゼーノンなる名前の役人が総額 500 ドラクマの銀貨を配下の担当者であるオクセーボアケースとオクシュバゾースに渡したもので、後の二人のうちオクセーボアケースが収納した容器に封印をしている。配下の担当者の二人の名前はいずれもイラン系である。

3.-c-2 インド貨幣の受取り。上記標識の反対側、口の割れ目の下、4ないし5行、3.-c-1よりも新しい標識。

- | | |
|---------------|--------------------|
| 1) テイモデーモスから | 2) によって計算された |
| 3) オクセーポアケースと | 4) ヘルマイオース taxaēna |
| 5) …… | |

形式は3.-c-1に同じ。taxaēnaについては、はっきりしないが、タキシラ?からのインド貨幣。

3.-c-3 インド貨幣の受取り。3.-c-1の右下寄り、4行。最も新しい標識。

- | | |
|------------------|---------------------------|
| 1) ピリスコスから | 2) 10000 kasapana taxaēna |
| 3) によってアリュアンデースと | 4) ストラ [トーン] |

kasapana は kārshāpana のギリシア文字への翻字である。これは多くの刻印をもつマウリア朝時代の方形貨幣である。

3.-c-4 インクの若干の痕跡。それに ako とみられる文字がみえ、あとは消えている。

通貨の多様性は、貨幣の基準についての統制が要求された。次にあげるのは、法定基準を満たしたことを証する標識である。(出典の史料 13)

壺の膨らんだ部分にみられた3箇所の標識、そのうち2箇所については読取り難いが、次の1箇所が完全に残っている。

3.-d-1

- 1) コスモスによって確認された法定銀貨
- 2) ニケーラ [トス] によって再確認された
- 3) ニケーラトス自身が封印した

人名のコスモスは、コスマスであるかもしれない。

4. 貨幣 (*FAKh, IV, p. 5-84, Pl. 2-8*)

アイハヌムで発見された貨幣は、王宮の財庫からは銀貨2個、その他の箇所から銀貨5個、それに銅貨を合わせると、総数264個である。そのうち銅貨10個は刻印のない地板、このことから銅貨を発行していたことが知られるが、銀貨の発行については不明である。貨幣面を読み取れるもの224個である。セレウコス朝以前と同王朝時代、グレコバクトリアとインドバクトリアの両時期までの分、合わせて184個、インドのもの5個、クシヤン朝のもの28個、イスラム時代のもの7個である。

アイハヌムの貨幣に関しては、多くの銅貨が研究対象になる。最多数は、セレウコス朝のアンティオコス1世（在位281-161 BC）のもの62個、次いでグレコバクトリアのエウテュデモス1世（在位 c. 230-c. 200 BC）の49個、そのまえの王でバクトリア王国の形成者ディオドトス1世と2世（両王の在位 c. 250-c. 230 BC）の26個、またインドバクトリア期にまたがるエウクラティデス1世（在位 c. 170-c. 145 BC）の12個である。この後の王のギリシア語貨幣は見付かっていない。この点、アイハヌムのヘレニズム都市はエウクラティデス1世との関係をもって終わることが予想されるのである。

5. その他 (*FAKh, VIII, p. 388-389*)

骨壺のギリシア語銘、陶片にみられる人名、グラフィッティ等、それにアラム語史料（1点）は省略する。

お わ り に

以上において、アイハヌム遺跡におけるギリシア語関係の基本的な史料にふれてきた。現在のところ、中央アジアにおけるヘレニズム都市の特色を、この遺跡以上に明らかにした場所はない。改めて遺構、遺物について取り上げるつ

もりである。最初に述べたように、発掘状況からみて、ギリシア植民都市としての都市活動は、アレクサンドロス大王の時代よりもやゝ後、つまりセレウコス1世の中央アジアとインド西辺における活躍期の後で、およそ前4世紀末頃からと考えられる、

したがって、碑文にみられるクレアルコスが、キュプロス島のソロイ出身で、ペリパトス派のクレアルコスとすれば、デルポイの格言を携えた彼の来訪は、この都市にとって早い時期であったわけで、その文化的水準をうかがうことができるのである。

哲学対話のパピルスが前3世紀半ばのものであり、劇の脚本とみられる羊皮紙が前2世紀前半までのものとすれば、この時期にいたるまで西方の文物が受入れられていたことは確かであろう。クレアルコスの碑文、また、この哲学対話から、カンダハール（アレクサンドレイア）で発見されたアシヨーカ王のギリシア語第二碑文との接点を探ることも可能ではなからうか⁽³⁾。

経済史料としての備忘標識については、その一部を取り上げたわけであるが、この地域的な経済の中心が支配者と密接に結びついていたというオリエンタ的構造を看取することができる。その一方で、管理組織がギリシア的であることも指摘できるのである。なお、備忘標識に示されている第24年は、統治年数とみられ、その長さからエウクラティデス1世が考えられる⁽⁴⁾。その支配の開始を前171年頃とすれば、24年目は前148年頃にあたり、この年のオリーブ油の記録ということになる。また、他の記録とそこにみられる人名を総合して考察するとき、取り上げてみた備忘記録は、148年頃に前後することが分り、この都市の終り頃の財政事情ということができよう。

略記号

BCH = *Bulletin de Correspondance Hellénique*.

FAKh = *Fouilles d'Âi Khanoum*.

MDAFA = *Mémoires de la Délégation archéologique française en Afghanistan*.

註

- (1) 報告書については、*FAKh, I, Campagnes 1965, 1966, 1967, 1968*, (MDAFA, XXI, 2 Tomes, 1973), par P. Bernard; *FAKh, II, Les propylées de la rue principale*, (MDAFA, XXVI, 1983), par O. Guillaume; *FAKh, III, Le sanctuaire du temple à niches indentées, 2. les trouvailles*, (MDAFA, XXVII, 1984), par H.-P. Francfort; *FAKh, IV, Les monnaies hors trésors, questions d'histoire gréco-bactrienne*, (MDAFA, XXVIII, 1985), par P. Bernard; *FAKh, V, Les remparts et les monuments associés*, (MDAFA, XXIX, 1986), par P. Leriche; *FAKh, VI, Le gymnase, architecture, céramique, sculpture*, (MDAFA, XXX, 1987), par S. Veuve; *FAKh, VII, Les petits objets*, (MDAFA, XXXI, 1987), par O. Guillaume et A. Rougeulle; *FAKh, VIII, La trésorerie du palais hellénistique d'Aï Khanoum*, (MDAFA, XXXIII, 1992), par C. Rapin.
- (2) F. Wehrli, *Die Schule des Aristoteles: Texte und Kommentar, III, Klearchos*, 2. Aufl., Basel / Stuttgart, 1969.
- (3) *FAKh, I*, L. Robert, p. 214; J. Harmatta, Languages and scripts in Graeco-Bactria and the Saka kingdom, in: J. Harmatta et al., *History of civilizations of Central Asia, II, The development of sedentary and nomadic civilization: 700 B. C. to A. D. 250*, (UNESCO, 1994), pp. 397-416.
- (4) O. Bopearachchi, *Monnaies gréco-bactriennes et indo-grecques. Catalogue raisonné*, (Bibliothèque Nationale, Paris, 1991), p. 66-72.